

高齢者の新たな運動者行動によるスポーツサービスの検討

木戸直美・小澤共子

高齢者の新たな運動者行動によるスポーツサービスの検討

木戸直美
小澤共子

運動者行動研究は、これまでに多くの報告がなされ、今日における体育・スポーツ事業の発展の礎となったことは明白である。しかしながら、これまでの運動者行動研究の基軸はスポーツ事業にかかわる行動体系がメインであり、その行動の背景としての運動者の生き方などとの関係は、必ずしも十分ではない。

近年における我が国では、急速な超高齢社会でありながらも、高齢者を対象とした運動者行動研究は、殆ど報告されていないのが現状であり、ましてや運動生活や運動者の生活様式の状況は明らかではない。

本研究では、静岡県A市での一般高齢者に焦点を当て、最も基本的な項目である運動者行動要因に加えて、ライフスタイル項目を中心に調査・分析を行い、考察した。その結果、今日的な高齢者の特徴的な運動者行動の状況が明らかになるとともに、今後の高齢者のためのスポーツサービスの構造やサービスづくりのポイントが示唆されたものとする。

1. 緒言

近年のスポーツ現象は、人々の価値観や社会状況の変化に伴い、ニーズの拡大化や地域コミュニティ形成などの目的の多様化を始め、目覚ましい進展を遂げている。その一つの成果として、2011年に施行されたスポーツ基本法では、「スポーツは世界共通の人類の文化である」という前文に始まり、「スポーツを通じて幸福で豊かな生活を営むことは、全ての人々の権利である」という「スポーツをする権利」が明文化されたことは非常に意義深い。しかしながら、一方では、さらなるスポーツ活動の質の向上や、スポーツをしたくても出来ない人々への普及振興など、真の文化としてスポーツが果たす使命や役割に期待が高まる。

多大な便益性をもたらすスポーツであるが、価値あるスポーツが社会に存在しただけでは、人々は何ら価値を得ることは出来ない。価値ある、また、文化としてのスポーツにかかわる現象が必要である。様々な学問の研究対象となる人間について、教育学では「学習者」、経済学・商学では「消費者」と呼ばれているが、体育・スポーツ経営学では、「多様なスポーツ現象との関わりとしての対象者の総称を「スポーツ生活者」という固有な名称でとらえ、さらにその中で、「行うスポーツ」に限定した対象者を「運動者」としている」(中村

2002a)。また、体育・スポーツの場をめぐり人々がどのような行動をするか、「運動」と「運動者」との結びつきに着目した「運動者行動」をテーマとした研究は、体育・スポーツ経営における最も基本的な課題である。

運動者行動研究は、宇土（1976）の体育・スポーツ事業論が基軸となっている。人々の運動の「場」や「機会」は、運動クラブ（Club）・運動プログラム（Program）・施設開放（Area）の3つのパターンにより生じており、これらの「場」や「機会」に対して接近－逃避という現象で捉えるものである。それぞれのパターンに対する接近行動の視点からの運動者を、C運動者・P運動者・A運動者・現時点では運動していないS運動（Stay運動）と分類している。さらに、それぞれの「場」や「機会」を整備し、より豊かな接近行動となるための事業として、クラブサービス事業（Club Service;C.S.）、プログラムサービス事業（Program Service;P.S.）、エリアサービス事業（Area Service;A.S.）の充実の必要性が求められている。これまでの運動者行動研究は、宇土（1976）を基点として、畑ら（1989）の運動者の主体的条件の類型化に関する研究など多くの報告が上げられ、今日における体育・スポーツ経営の発展の礎となったことは明白である。

しかしながら、現代の多様化した体育・スポーツ現象に対応した、より多角的な運動者行動研究の構築は、ほとんど進展が見られないと言える。この様な状況の中で、石川ら（2011, 2012, 2013）は、若者文化としての今日的なスポーツであるストリートダンスに着目し、小野里ら（2014）はダンスや舞踊愛好家に焦点を当て、舞踊文化等を踏まえた固有な運動者行動論を論じている。ここでは、宇土（1976）の体育・スポーツ事業論をベースとした伝統的な運動者行動論の視点に加え、若者文化や舞踊文化といった固有な文化や社会状況の変化に伴う運動者行動の変容を包含した新たなスポーツ行動論として展開している。そして、現代に即した有効性の高いスポーツサービスやマネジメントのための現代的スポーツプロモーションの必要性和発展性について有用な示唆を与えていると言える。

2014年版世界保健統計によると我が国は、長寿世界一となり、高齢化率25.1%¹となる超高齢社会を迎えた今日における体育・スポーツは、真の文化として確立するために未だ、多くの課題が散見される。例えば、国民生活に関する世論調査による自由時間の過ごし方の結果（70才以上）²などである。これらの課題究明に向けて、高齢者の運動者行動研究が不可欠であるものの、高齢者を対象者とした運動者行動研究は、健康体操教室プログラムに言及し健康体操の継続意志に有効な示唆をもたらした木戸ら（2013）の報告以外の知見は殆どない現状である。ましてや高齢者の運動生活や運動者の生活様式としての詳細なライフス

1. 内閣府平成26年版高齢社会白書、平成25年度高齢化の状況を参照。

2. 内閣府（2010）国民生活に関する世論調査（平成22年6月）<http://www8.cao.go.jp/survey/h22/h22-life/index.html>（参照日2013年6月10日）国民生活に関する世論調査による自由時間の過ごし方の結果（70才以上）では、「ラジオを聞いたり、テレビを見たりする」71.4%、「趣味を楽しむ」40.7%、に対し「運動やスポーツなどを動かす」との回答は20.1%である。

タイトルの状況は明らかではない。

そこで、本研究では、これらの背景を踏まえ、現代社会での特徴的なライフスタイルを有する高齢者に焦点を当てた。超高齢社会や高齢者文化を包含した新たな運動者行動論の解明から、現代的スポーツプロモーションについて探索することを目指すものである。より具体的には、一般高齢者を対象として、従来の運動者行動論要因である「基本特性」、「スポーツ特性」、「スポーツ行動」に加え、「ライフスタイル」項目を中心に調査・分析を行い、今後のより有効的なスポーツサービスについて検討することを目的とする。

II. 研究の方法

1. 基本的なアプローチ

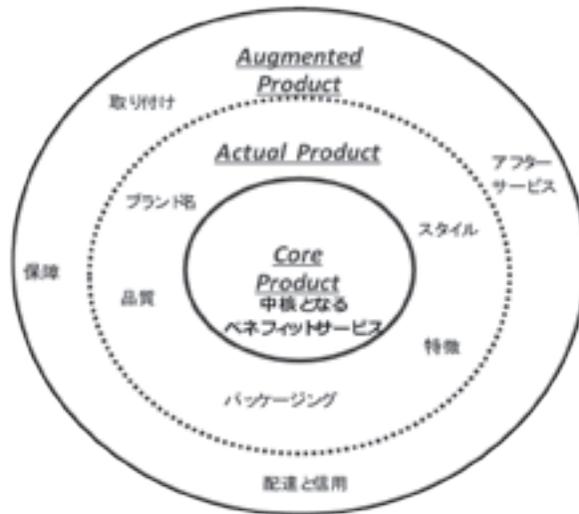


図1 Kotlerによる製品レベル 出典：コトラー/アームストロング（1995）に加筆修正

図1はKotler（1995）による製品レベルについての構造モデルを示している。

これまでの体育・スポーツ経営分野でのスポーツサービス・スポーツプログラム開発の先行研究として、広範的な製品開発に多くの有効性が報告（例えば、小野里ら（2002）によるテニスレッスンのスポーツサービスなど）されているKotler（1995）の概念がある。Kotler（1995）は、「製品とは、特定のニーズや欲求を充足する興味・所有・使用・消費のために市場に提供されるすべてのものを指す。それは、物理的財・サービス・人間・場所・組織・アイデアを含んでいる。」としている。そして、提供される製品について、消費者（本研究での運動者）が真に求める価値やベネフィットを理解することや、明確に表現することの必要性と複雑性を唱え、価値やベネフィットを理念的な各要因（プロダクト（図1：品質、ブランド名など））から構成している。さらに、異なるレベル（Core Product, Actual

Product, Augmented Product) によって成り立つサービスの構造モデルを明らかにしている。無形性・流動性であることが特徴である高齢者のスポーツサービスを検討するにあたり、Kotlerの構造モデルを援用し、高齢者の価値やベネフィットを明確にすることで適合的なスポーツサービス開発に有効的であると考えられる。本研究における高齢者スポーツでは、Kotlerの構造モデルにおいて、中核に位置づくベネフィットに対応したサービスは、運動・スポーツに直接的に関与する従来の体育・スポーツ事業（C.S.、A.S.、P.S.）が当然当てはまる。しかしながら、中核ベネフィットを取り巻く周辺次元での付随的あるいは付加的なベネフィットに基づくサービスについては、これまで明らかにされておらず、付随的、付加的なベネフィット要因についての究明が不可欠である。

体育・スポーツ経営の目的は、スポーツ行動の成立、維持、発展を通して人々の豊かなスポーツ生活を実現させることである（清水 2002）。また、スポーツ生活とは、人間生活全体の中で、多様な部分から構成されている全生活の一部であり、同時に、衣食住を基礎とする人間のすべての生活現象の中からスポーツにかかわる局面を切り取ったときに成立する生活であり、生活におけるスポーツ相互作用やかかわり方の総体を指す（中村 2002a）。言い換えれば、豊かなスポーツ生活の実現とは、運動・スポーツと言った単一的な要因に起因して成立するものではなく、人間の全ての生活現象、つまり「ライフスタイル」との相互関係の中で成立するものであると考える。さらに、近年の高齢者研究では、QOL・ADL（Activities of Daily Living・日常生活動作）・IADL（Instrumental Activity of Daily Living・手段的日常生活動作）に代表される各指標研究においても、単に運動や動作への着目よりむしろ「ライフスタイル」との連動性に、より重点が置かれている。

これらの背景を踏まえ、本研究では、高齢者のスポーツサービスを検討するにあたり、Kotlerの構造モデルに基づき、伝統的な宇土の体育・スポーツ事業論を中核的ベネフィットとする基本的サービスと捉え、周辺の次元でのベネフィット要因解明にあたりライフスタイルの視点からアプローチを行う。

現代に即した運動者行動の分析視座として、高齢者の特徴的なライフスタイル項目の分析からベネフィット要因を明らかにし、総括的に高齢者のスポーツサービスについて検討しようとするものである。

2. 調査の実施と分析の手順

(1) 調査項目の設定

調査項目は、これまでの運動者行動分析研究である前田ら（2008）、林ら（2011）、現代的スポーツ行動研究である石川ら（2011, 2012, 2013）などの先行研究を踏まえ、「基本特性」（性別、年齢、家族構成）、「スポーツ特性」（運動部所属経験、スポーツ・運動の選好）、「スポーツ行動」（運動頻度、運動生活）、「ライフスタイル」とした。「ライフスタイル」については、上記の先行研究に加え、高齢者特有の項目を抽出するため、内閣府を始めとする関連資料・

調査^{9) 10) 11) 17) 18)}や高齢者を対象とした運動者行動研究である木戸(2013)を踏まえ選定した。「ライフスタイル」は中項目7項目(健康、習慣、嗜好、他者との関連、情報、趣味、経済)による43項目を設定し、「非常に思う」から「全く思わない」までの5段階の評定尺度法による評定を求めた。

(2) 調査方法と分析手順

調査は、静岡県A市で、70才以上を対象とした敬老大会の参加者を対象とした。調査方法は自記筆アンケート調査(配票調査法)であり、記入が困難な場合には、聞き取り調査とした。調査期間は、2013年10月である。有効回答は、249名(95.0%)であった。調査対象者、及び敬老大会実施行政主体には研究の主旨を説明し承諾を得た。

収集されたデータに対しSPSS17.0ver.を用いて、基礎集計・記述統計・クロス分析を行った。分析に対して必要に応じ、 χ^2 検定、F検定(一元配置分散分析)を用いて有意性を検証した。

III. 結果と考察

1. 対象者の基本特性およびスポーツ特性・スポーツ行動

表1は、対象者の基本特性を示している。性別では、「男性」85人(34.1%)、「女性」163人(65.5%)である。年齢は、「75～79才」91人(36.5%)、「70～74才」81人(32.5%)、「80～84才」48人(19.3%)の順に多い。次に、家族人数は、「2人」が最も多く87人(34.9%)、次いで「1人」57人(22.9%)であった。

スポーツ特性・スポーツ行動では(表2)、運動部所属経験は、「ある」124人(49.8%)、「ない」102人(41.0%)であった。「運動・スポーツは好きですか?」という項目について、「はい」193人(77.5%)と圧倒的に多く、「いいえ」42人(16.9%)という結果が示された。運動・スポーツの頻度では、「週3回以上」(81人(32.5%))、次いで「週1～2回」(76人(30.5%))が順に多い結果を示した。「年1～3回」は51人(20.5%)で約1/5を占めている。週1回以上の運動実施者は63%の結果が示された。

表1 調査対象者の基本特性

基本特性	n=249	f	%
性別	男性	85	34.1
	<u>女性</u>	<u>163</u>	<u>65.5</u>
	無回答	1	0.4
年齢	<u>70-74才</u>	<u>81</u>	<u>32.5</u>
	<u>75-79才</u>	<u>91</u>	<u>36.5</u>
	80-84才	48	19.3
	85-89才	21	8.4
	90-94才	7	2.8
	無回答	1	0.4
家族人数	1人	57	22.9
	<u>2人</u>	<u>87</u>	<u>34.9</u>
	3人	44	17.7
	4人	24	9.6
	5人	13	5.2
	6人	8	3.2
	7人	6	2.4
	8人	2	0.8
	無回答	6	2.4
	配偶者	<u>いる</u>	<u>125</u>
<u>いない</u>		<u>124</u>	<u>49.8</u>

表2 調査対象者のスポーツ特性・スポーツ行動

スポーツ特性	n=249	f	%
運動部所属経験	<u>ある</u>	<u>124</u>	<u>49.8</u>
	ない	102	41.0
	無回答	23	9.2
運動・スポーツは好き?	<u>はい</u>	<u>193</u>	<u>77.5</u>
	いいえ	42	16.9
	無回答	14	5.6
運動・スポーツの頻度	<u>週3回以上</u>	<u>81</u>	<u>32.5</u>
	<u>週1~2回</u>	<u>76</u>	<u>30.5</u>
	月1~3回	22	8.8
	3か月に1~2回	7	2.8
	年1~3回	51	20.5
無回答	12	4.8	

※回答の多い項目を強調下線で表示

2. 対象者の運動生活

表3 運動生活の類型と階層

類型	CAP	CA	CP	C	AP	A	P	S
C運動者	○	○	○	○	△	△	△	△
A運動者	○	○	○	△	○	○	△	△
P運動者	○	△	△	○	○	△	○	△

C階層
A階層
P階層
S階層

(八代 中村 編著 (2005) 「体育・スポーツ経営学講義」より抜粋)

行うスポーツのC.S.、A.S.、P.S.に対する「場」をめぐる接近-逃避行動を単純に組み合わせさせて分類したものが運動生活の類型的把握である(中村 2002b)。運動者には、一つの運動の「場」にしか接近行動をとらない者と、2つ、3つの「場」に複動的に接近行動をとる者もいる。この組み合わせは、表3に示すように8類型と4階層(C階層、A階層、P階層、S階層)に分けられる。類型的把握は、複数領域にまたがる運動生活や集団的な把握に最も有用とされている。

(1) 基本特性による運動生活

表4は、対象者の類型による運動生活を示している。全体では、「A」が最も多く103人(41.4%)、次いで、「S」が43人(17.3%)となっている。階層別では、「A階層」は最も多く131人(52.6%)、「C階層」62人(24.9%)、「P階層」が最も少なく9人(3.6%)である。これらは、結果1での週3回以上の運動実施者が最も多い状況と合わせて、対象者はクラブやプログラムへの参加型ではなく、非常に自立して個人的に運動・スポーツを実践していることが示された。しかしながら、C階層の増加が運動頻度の増加につながるという報告も多く、対象者の今後の課題とも言える。性別では、男性は「A」が約半数(44人(51.8%))を占め、「S」は18人(21.2%)であり、P運動者が非常に少なく「P」は0.0%である。女性は「A」59人(36.2%)、「S」25人(15.3%)、「AP」21人(12.9%)の順に多い。「A階層」(49.1%)が最も多いが「C階層」も一定の割合を占めている。

これらのクロス分析について χ^2 検定を用いた結果では、男女間に有意に相違があることが示された($P<0.05$)。

表4 類型による運動生活

	全体 n=249		男性 n=85		女性 n=163		χ^2 検定
	f	%	f	%	f	%	
CAP	22	8.8	3	3.5	19	11.7	$\chi^2=29.0360$ DF=16 P<0.05
CA	20	8.0	7	8.2	12	7.4	
CP	10	4.0	2	2.4	8	4.9	
C	10	4.0	4	4.7	6	3.7	
AP	28	11.2	7	8.2	21	12.9	
A	103	41.4	44	51.8	59	36.2	
P	9	3.6	0	0.0	9	5.5	
S	43	17.3	18	21.2	25	15.3	
未記入	4	1.6	0	0.0	4	2.5	
C階層	62	24.9	16	18.8	45	27.6	
A階層	131	52.6	51	60.0	80	49.1	
P階層	9	3.6	0.0	0.0	9	5.5	
S階層	43	17.3	18	21.2	25	15.3	

(2) スポーツ特性による運動生活

表5は運動部所属経験と類型による運動生活を示している。運動部所属経験があるに対して「はい」と答えた対象者は、「A」が最も多く40人(32.8%)である。階層別では、「A階層」が多い傾向を示し49.2%、次いで「C階層」38.5%であり、「S階層」は僅か8人(6.6%)の結果であった。一方、「いいえ」では、「A」が圧倒的に多く50人(50.0%)、階層別においても「A階層」は55.0%であるが、次いで「S階層」が約1/3を占め、「C階層」12人(12.5%)

表5 運動部所属経験と運動生活（類型）

	はい		いいえ		無回答		χ^2 検定
	n=122		n=91		n=23		
	f	%	f	%	f	%	
CAP	17	13.9	5	5.0	0	0.0	$\chi^2=53.9302$ DF=16 P<0.001
CA	14	11.5	4	4.0	2	8.7	
CP	9	7.4	0	0.0	1	4.3	
C	7	5.7	3	3.0	0	0.0	
AP	20	16.4	5	5.0	3	13.0	
A	40	32.8	50	50.0	13	56.5	
P	7	5.7	2	2.0	0	0.0	
S	8	6.6	31	31.0	4	17.4	
C階層	47	38.5	12	12.0	3	13.0	
A階層	60	49.2	55	55.0	16	69.6	
P階層	7	5.7	2	2.0	0	0.0	
S階層	8	6.6	31	31.0	4	17.4	

表6 運動の選好と運動生活（類型）

	はい		いいえ		無回答		χ^2 検定
	n=191		n=40		n=14		
	f	%	f	%	f	%	
CAP	20	10.5	2	5.0	0	0.0	$\chi^2=49.24332$ DF=16 P<0.001
CA	18	9.4	1	2.5	1	7.1	
CP	10	5.2	0	0.0	0	0.0	
C	8	4.2	2	5.0	0	0.0	
AP	25	13.1	1	2.5	2	14.3	
A	85	44.5	15	37.5	3	21.4	
P	7	3.7	1	2.5	1	7.1	
S	18	9.4	18	45.0	7	50.0	
C階層	56	29.3	5	12.5	1	7.1	
A階層	110	57.6	16	40.0	5	35.7	
P階層	7	3.7	1	2.5	1	7.1	
S階層	18	9.4	18	45.0	7	50.0	

の結果である。これらは、有意な相違を示した ($P<0.001$)。過去のスポーツ特性である運動部所属経験が高齢者になった際の運動生活と深い関連が示されると同時に、生涯にわたる豊かなスポーツ生活構築のためには、学生時代の運動・スポーツ経験の影響が明示されていると言える。

運動の選好と類型による運動生活では（表6）、「運動・スポーツが好きですか？」という問いに対して「はい」と答えた対象者は、ここでも「A」が最も多く85人（44.5%）、次いで「AP」25人（13.1%）、「CAP」20人（10.5%）、「CA」18人（9.4%）の順である。階層別では、「A階層」が多い傾向を示し57.6%、「C階層」29.3%、「S階層」18人（9.4%）の結果であった。「いいえ」の回答者は「S」が圧倒的に多く18人（45.0%）、「A」15人（37.5%）であり、他のグループは、非常に少ない。階層別でも「A階層」40.0%、「C階層」12.5%である。つまり、運動が好きではない高齢者は、そのほとんどがS運動者かA運動者である。これらについて統計的に有意な相違 ($P<0.001$) が示され、「運動が好き」であることが豊かな運動生活と重要な関係があることは、言うまでもないが、逆に、運動が好きでないにもかかわらず、約半数の高齢者は、運動・スポーツを実践している状況が明らかであり、運動・スポーツの健康のための手段的目的とする状況が明確である。さらに、「いいえ」のグループの「S階層」に対するアプローチがスポーツサービス展開で重要になるものと考えられる。

3. 対象者のライフスタイル

(1) 基本特性からみたライフスタイル

表7は、対象者のライフスタイル43項目に対する記述統計を示した。全体的に高い数値を示した項目は、「食事」:「D1 食事が美味しくとれる」(4.53)・「D6 栄養のバランスを考えて食事をしている」(4.12)、「D17 あいさつをよくする」(4.20)、「D14 魚が好き」(4.26)、「D19 日本茶が好き」(4.16)、「地域社会」:「D21 この地域が楽しい」(4.13) や、「貢献」:「D24

表7 ライフスタイルスタイル項目の記述統計

ライフスタイル項目			全体			男性			女性			F 検定
			N	Mean	S.D.	N	Mean	S.D.	N	Mean	S.D.	
健康	食事	D1 食事が美味しくとれる	249	4.53	0.76	85	4.35	0.81	163	4.62	0.71	*
		D6 栄養のバランスを考えて食事をしている	247	4.12	0.97	84	3.83	1.04	162	4.26	0.91	**
	睡眠	D11 毎日よく眠れる	246	4.05	1.07	85	4.06	1.00	160	4.04	1.10	n.s.
		D16 昼寝をする	243	2.86	1.45	83	2.92	1.39	159	2.82	1.47	n.s.
	運動	D2 運動・スポーツをよくしている	247	3.47	1.39	84	3.21	1.42	162	3.60	1.35	n.s.
		D4 ラジオ体操・テレビ体操を行っている	241	2.98	1.52	83	2.46	1.29	157	3.24	1.56	***
D27 スポーツをよく見る (新聞、テレビ、観戦など)		247	3.85	1.22	85	4.13	0.97	161	3.70	1.32	*	
D34 散歩によく行く		244	3.50	1.45	83	3.35	1.37	160	3.58	1.49	n.s.	
習慣	D3 おしゃれをするのが楽しい	244	3.69	1.10	83	3.16	1.06	160	3.96	1.02	***	
	D5 コンビニを利用する	243	2.85	1.39	83	2.87	1.30	159	2.83	1.43	n.s.	
	D17 あいさつをよくする	249	4.20	0.98	85	3.99	1.11	163	4.31	0.90	*	
	D22 早寝早起きを心がけている	245	3.96	1.09	83	3.75	1.07	161	4.06	1.08	n.s.	
	D25 家事をするのが楽しい	246	3.71	1.13	82	3.13	1.15	163	3.99	1.00	***	
	D36 化粧・髪型など身だしなみに気を使っている	243	3.76	1.14	82	3.32	1.12	160	3.98	1.08	***	
嗜好	D13 肉が好き	249	3.75	1.11	85	3.80	1.02	163	3.72	1.16	n.s.	
	D14 魚が好き	249	4.26	0.90	85	4.24	0.81	163	4.27	0.94	n.s.	
	D18 コーヒーが好き	243	3.45	1.31	82	3.35	1.35	160	3.49	1.29	n.s.	
	D19 日本茶が好き	247	4.16	0.97	84	4.02	0.88	162	4.23	1.02	n.s.	
	D28 間食をするのが好き	244	2.91	1.22	83	3.10	1.12	160	2.79	1.25	*	
	D37 お酒が好き	244	2.46	1.52	83	2.99	1.59	160	2.17	1.41	***	
他者との 関連	家族	D20 家族とよく話をする	242	3.70	1.26	84	3.75	1.02	157	3.66	1.38	n.s.
		D30 家族と運動・スポーツの話をよくする	238	3.23	1.37	80	3.34	1.40	157	3.16	1.34	n.s.
	地域社会	D21 この地域が楽しい	246	4.13	0.91	83	3.95	0.91	162	4.22	0.90	n.s.
		D29 (町内会など) 社会参加活動をしている	246	3.67	1.33	84	3.61	1.33	161	3.69	1.34	n.s.
	貢献	D38 近所の人と親しく付き合っている	242	4.03	1.13	83	3.83	1.21	158	4.13	1.08	n.s.
		D24 人に喜んでもらいたい	245	4.24	0.88	84	4.06	0.86	160	4.33	0.88	n.s.
友人	D31 ボランティア活動に参加している	239	3.02	1.50	81	2.93	1.51	157	3.06	1.49	n.s.	
	D8 人と話すのが楽しい	249	4.30	0.88	85	3.98	0.98	163	4.47	0.77	***	
支援	D12 友達・いい仲間がいる	248	4.35	0.94	85	4.11	1.12	162	4.48	0.80	**	
	D33 何らかの手助け (支援) やサービスを受けている	233	1.65	1.15	76	1.70	1.15	156	1.62	1.14	n.s.	
情報	D10 パソコンを使う	246	1.80	1.30	82	2.21	1.40	163	1.61	1.20	*	
	D26 新聞を購読している	243	3.98	1.25	81	4.19	0.98	161	3.86	1.36	n.s.	
	D35 ニュースをよく見る	241	4.32	0.93	83	4.29	0.92	157	4.33	0.94	n.s.	
	D39 メールをする	244	2.07	1.45	83	1.96	1.35	160	2.13	1.50	n.s.	
	D40 携帯電話を使う	244	2.99	1.55	82	2.93	1.60	161	3.04	1.52	n.s.	
趣味	D7 花や植物に興味がある	249	4.13	1.04	85	3.78	1.16	163	4.31	0.93	***	
	D9 お買い物が好きである	248	3.98	1.11	84	3.49	1.16	163	4.23	0.99	***	
	D23 旅行が好き	245	4.13	1.03	84	3.96	1.07	160	4.22	0.99	n.s.	
	D32 畑作りに興味がある	243	2.79	1.51	82	2.62	1.45	160	2.87	1.53	n.s.	
	D41 ドラマ・映画が好き	245	3.68	1.16	84	3.64	1.12	160	3.69	1.19	n.s.	
	D42 テレビをよく見る	244	4.00	1.02	84	4.20	0.82	159	3.89	1.09	*	
	D43 動物に興味がある	244	3.23	1.32	83	3.25	1.25	160	3.20	1.35	n.s.	
経済	D15 経済的に余裕がある	244	3.31	1.13	82	3.35	1.03	161	3.27	1.18	n.s.	

***P<0.001 **P<0.01 *P<0.05 ※平均値 4.0 以上の項目を強調下線で表示

人に喜んでもらいたい」(4.24)、[友人]:「D8 人と話すのが楽しい」(4.30)・「D12 友達・いい仲間がいる」(4.35)などの『他者との関連』カテゴリー、「D35 ニュースをよく見る」(4.32)、及び『趣味』カテゴリーの「D7 花や植物に興味がある」(4.13)・「D23 旅行が好き」(4.13)などの各項目である。[食事]、[友人]、『趣味』の各カテゴリー内の数値が高い傾向にある。一方で、「D16 昼寝をする」(2.86)、「D5 コンビニを利用する」(2.85)、「D28 間食をするのが好き」(2.91)、「D37 お酒が好き」(2.46)、「D33 何らかの手助け (支援) やサービスを受けている」(1.65)、『情報』カテゴリーでの「D10 パソコンを使う」(1.80)等、「D32 畑作りに興味がある」(2.79)の各項目は、低い反応を示した。『運動』カテゴリーは必ずしも高い数値を示していない。また、『趣味』では項目によりバラつきが見られる。

性別による分析結果では F 検定（一元配置分散分析）を用いた。その結果、男性は女性に比べ、有意に「D28 間食」（ $P<0.05$ ）や「D37 お酒」（ $P<0.001$ ）を好み、「D42 テレビをよく見る」（ $p<0.05$ ）傾向が見られ、また、「D10 パソコンを使う」や「D27 スポーツをよく見る」（ $P<0.05$ ）の項目で高い反応を示した。女性は、「食事」：2 項目（それぞれ $P<0.05$ 、 $P<0.001$ ）、[運動]：「D4 ラジオ体操・テレビ体操を行っている」（ $P<0.001$ ）、[習慣]：「D3 おしゃれをするのが楽しい」（ $P<0.001$ ）・「D22 早寝早起きを心がけている」（ $P<0.001$ ）・「D25 家事をするのが楽しい」（ $P<0.001$ ）、[友人]：2 項目（それぞれ $P<0.001$ 、 $P<0.01$ ）、[趣味]：「D7 花や植物に興味がある」（ $P<0.001$ ）・「D9 お買い物が好きである」（ $P<0.001$ ）の 11 項目において統計的に有意に高い反応を示した。

これら詳細なライフスタイルに関する分析から、高齢者固有のライフスタイル実態や特徴が明らかになり、今後のより適合的なスポーツサービス展開に有用な要因として示唆された。即ち、「食事」、「睡眠」、「地域社会」、「貢献」、「友人」、「趣味」：「花や植物に興味」、「旅行が好き」の各要因である。また、性別による明らかな相違傾向が示された。これまでに実施されている高齢者を対象としたスポーツサービスやスポーツプログラムでは、男性参加率が低いことが問題提起されている。実際の現場での高齢者スポーツ指導者や事業提供者は、供給サイドからの、これまでの経験値による事業展開が殆どであり、運動者主体として需要サイドである男性固有のライフスタイルの理解により、男性参加率向上への有効的なサービス化への可能性が期待できる。

(2) 運動生活からみたライフスタイル

表 8 運動生活からみたライフスタイル

	DF=28	N	χ^2 値	有意確率
D2	運動・スポーツをよくしている	243	100.7225	***
D3	おしゃれをするのが楽しい	240	53.3131	**
D4	ラジオ体操・テレビ体操を行っている	238	62.5511	***
D11	毎日よく眠れる	242	54.3831	**
D12	友達・いい仲間がいる	244	42.0675	*
D23	旅行が好き	241	43.8477	*
D24	人に喜んでもらいたい	241	48.2967	**
D29	(町内会など) 社会参加活動をしている	242	41.7993	*
D30	家族と運動・スポーツの話をよくする	235	43.4876	*
D34	散歩によく行く	240	72.8155	***
D36	化粧・髪型など身だしなみに気を使っている	239	45.2822	*
D37	お酒が好き	240	49.3922	**
D38	近所の人と親しく付き合っている	238	43.3003	*
D40	携帯電話を使う	240	52.9183	*
D43	動物に興味がある	240	52.8348	*

*** $P<0.001$ ** $P<0.01$ * $P<0.05$

表8は対象者の運動生活とライフスタイルとの関係について示している。ライフスタイルの5段階評定尺度による回答を、運動生活の8類型による分類とクロス分析し、 χ^2 検定により有意性が確認できた項目を示した。

〔運動〕:「D2 運動・スポーツをよくしている」・「D4 ラジオ体操・テレビ体操を行っている」・「D34 散歩によく行く」の各項目は〔運動〕カテゴリであり、当然の結果であると考えられる。これらに加え、『習慣〕:「D3 おしゃれをするのが楽しい」・「D36 化粧・髪型など身だしなみに気を使っている」や『他者との関連〕での〔家族〕・〔地域社会〕・〔貢献〕・〔友人〕の各グループ間、あるいは、『趣味〕の「D23 旅行が好き」・「D43 動物に興味がある」の各項目で運動生活によるライフスタイルの相違が明確となった。

これらの結果は、運動生活が単に運動・スポーツ実践の違いを示しているのではなく、付加的にライフスタイルの各要因が結びついているものと考えられる。運動・スポーツを核として、ライフスタイル要因の『習慣〕、〔家族〕、〔地域〕、〔貢献〕、〔友人〕や『趣味〕が組み合わさっていることが浮上した。

4. 高齢者の運動者行動分析によるスポーツサービスの検討

体育・スポーツ経営体の営みとは、様々な運動需要に対して、よりの確な条件整備を行い、人々の豊かなスポーツ生活の実現を目的としている。また、スポーツ生活とは、ライフスタイルとの相互関係の中で成立するものであり、対象者の詳細なライフスタイルを包んだサービスの整備が必要となろう。

今日的な高齢者のためのスポーツサービスの捉え方について、Kotlerの構造モデルに基づき、次の①、②を踏まえ、本研究での運動者行動分析による結果から、図2に示すモデルを提示することができる。

①結果と考察3. (1) 記述統計によるライフスタイル分析での〔運動〕要因が必ずしも高く示されておらず、周辺のサービスの必要性が示唆された。

②結果と考察3. (2) 運動生活とライフスタイル分析から運動・スポーツを核として、ライフスタイルの『習慣〕、〔家族〕、〔地域〕、〔貢献〕、〔友人〕、『趣味〕の各要因が運動・スポーツに組み合わさっていることが示唆された。

運動・スポーツに直接的に機能するスポーツ施設やプログラムなどの基本的サービスに加え、運動・スポーツに必ずしも直接的ではなく、運動・スポーツに間接的ともなるライフスタイルと連動した「付加的サービス」を加えた総括的なスポーツサービスを整備・提供することが豊かなスポーツ生活への効果的なアプローチになるものと考えられる。

また、本研究の分析結果から、対象者のスポーツサービスを検討する上での有用な要因(Product)が得られた。その一つである〔友人〕は、これまでのスポーツサービスやスポーツマーケティング研究でもマーケティングミックスのPersonnel・Participant要因として注目されてきた。しかしながら、『嗜好〕や『趣味〕要因としての「魚が好き」、「日本茶が好

き」、「旅行が好き」などの項目は、これまで、ほとんど重要視されていないが、日常生活に極めて密接した身近で重要な項目であると考え。Kotler はサービス展開について、異なるレベル別に、各要因（Product）を明確に捉えることの重要性と同時に、各要因（Product）

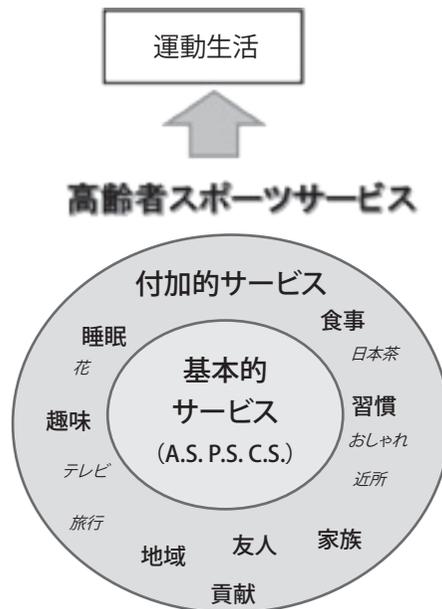


図2 本研究における高齢者スポーツサービスの構造

を消費者のベネフィットの束としてパッケージ化することの必要性・有効性を提唱している。即ち、各要因は、単一的ではなく、複数要因が束となって機能するのである。提案されたモデルに基づき、これらの要因のパッケージ化によるスポーツサービスとは、例えば、「友人」、「日本茶」を組み合わせ、基本的サービスであるスポーツ施設（A.S.）に「和カフェ」を併設することや、「旅行」を付加的サービスとして健康体操プログラム（P.S.）に温泉旅行などヘルスツーリズムをセット提供することなどの方法の提案が可能となる。

この様な、運動実践とは直接関係のない『嗜好』や『趣味』、などに着目した付加的サービスを含めた総括的なスポーツサービスが、今後のより有効的なスポーツサービスとしての可能性が示唆されると同時に、類型による運動生活のグループ別、性別などのさらに踏み込んだ特性別による周密的、付加的サービスの解明が、今後の、よりきめ細やかなスポーツサービス、マネジメントにつながると考える。

IV. 結論

本研究は、現代的な運動者行動研究として、高齢者を対象として関連分析を行い、今後の必要なスポーツサービスについて検討した。その結果は、以下のように要約される。

1. 現代における特徴的な運動者である高齢者の固有なスポーツ特性・スポーツ行動、運動生活、ライフスタイル実態が明らかになった。
2. 高齢者の特徴的な運動者行動を踏まえた効果的なスポーツサービスのあり方が浮上した。

高齢者のスポーツサービスのための有用な要因が示され、新たなスポーツサービスの捉え方や、これまでの基本的サービスに、付加的サービスを加えたサービスづくりについてのモデルが構成された。さらに、モデルに基づく具体的なサービスの提案が可能であった。

3. 運動者行動研究では、運動生活、ライフスタイルを踏まえたスポーツサービス開発への期待や重要性が示唆された。

高齢者を対象としたより適合的なスポーツサービス、及びマネジメントのためには、運動者行動分析の視点から、他地域など対象者を拡大した分析が必要であると同時に、提案されたサービスの実証ならびに有効性の検討が、今後の課題であると考えられる。

謝辞

静岡県熱海市役所 健康福祉部、熱海女性連絡会の皆様に多大なるご協力を頂きました。心より感謝申し上げます。

引用文献

- 1) 畑攻、宇土正彦、八代勉 (1984) 運動・スポーツ行動に対する運動者主体的条件の類型化に関する研究. 筑波大学体育科学系紀要 7 : 11-19.
- 2) 林園子、池田延行、田川絵梨ほか (2011) 中学生の日常生活におけるスポーツの機能とマネジメントに関する研究. 日本体育学会第 62 回大会予稿集.
- 3) 石川織江、畑攻、田川絵梨 (2011) ストリートダンサーの特性と行動に関する分析と考察. 日本体育学会第 62 回大会予稿集、p.171.
- 4) 石川織江、畑攻、田川絵梨ほか (2012) ストリートダンサーのマーケティング. 日本体育学会第 63 回大会予稿集、p.180.
- 5) 石川織江 (2013) ストリートダンサーの基礎的マーケティング. 平成 24 年度日本女子体育大学大学院修士論文.
- 6) 木戸直美、畑攻、小野里真弓 (2013) 女性高齢者に適合する健康体操プログラムとマネジメントの検討. 日本女子体育大学紀要第 43 巻 : 21-30.

- 7) コトラー/アームストロング:和田充夫、青井倫一訳(1995)[新版]マーケティング原理.ダイヤモンド社、東京.
- 8) 前田佳奈、畑攻、成瀬美紀ほか(2008)子どもの体力向上実践事業の成果とマネジメントの検討.日本女子体育大学紀要 38.69-79.
- 9) 内閣府 共生社会政策統括官(2012)高齢者対策 平成24年度版 高齢者白書:2-3.
- 10) 内閣府 共生社会政策統括官(2009)高齢者対策 平成21年度 高齢者の日常生活に関する意識調査結果(全体版):1-8.
- 11) 内閣府(2010)国民生活に関する世論調査(平成22年6月) <http://www8.cao.go.jp/survey/h22/h22-life/index.html> (参照日2013年6月10日).
- 12) 中村平(2002a)スポーツ生活と運動生活:体育・スポーツ経営学講義(八代勉、中村平編著)、p41-42、大修館書店、東京.
- 13) 中村平(2002b)スポーツ生活と運動生活:体育・スポーツ経営学講義(八代勉、中村平編著)、p50、大修館書店、東京.
- 14) 小野里真弓、畑攻(2002)テニスレッスンにおけるベネフィットセグメンテーションに関する研究.日本女子体育大学紀要 32:115-123.
- 15) 小野里真弓、畑攻、小山佳代子ほか(2014)ダンス愛好者の運動者行動に関する研究—舞踊学専攻学生のダンス・スポーツ行動分析から—。日本女子体育大学紀要 44:11-20.
- 16) 清水紀宏(2002)スポーツ経営とは:体育・スポーツ経営学講義(八代勉、中村平編著)、p.23、38-39 大修館書店、東京.
- 17) 総理府広報室(1987)日本人のライフスタイル.大蔵省印刷局、東京.
- 18) 東京大学高齢社会総合研究機構(2013)東大がつくった確かな未来視点を持つための高齢社会の教科書、(株)ベネッセコーポレーション、東京.
- 19) 宇土正彦(1976)体育管理学入門.大修館書店、東京.

参考文献

- 安藤喜久雄編(1998)若者のライフスタイル.学光者、東京.
- 浅井慶三郎、清水滋編著(1991)サービス業マーケティング:改訂版、同文館、東京.
- 橋本修二(2012)平成23～24年度厚生労働科学研究「健康寿命における将来予測」.東京.
- 畑攻(2006)第5章1製品としてのスポーツ:改訂版スポーツ経営学(山下秋二、中西純司、畑攻ほか編)p94-99、大修館書店、東京.
- 近藤隆雄(1999)サービス・マネジメント～サービス商品の開発と顧客価値の創造～.生産性出版、東京.
- Kotler.P.(2002)Marketing management、The millennium edition. New Jersey: Human Kinetics.
- 公益財団法人 健康・体力づくり事業団(2010)高齢者のQOLを支える介護予防事業調査(概

要版). 東京.

久野譜也 (2013) ICT と超高齢化対応の「健幸都市」-Smart Wellness City による健康長
寿世界一の実現を目指して -http://www.soumu.go.jp/main_content/000199079.pdf#

(参照日 2013 年 4 月 10 日).

大須賀洋祐、藪下典子、金美芝他 (2012) 身体的虚弱が疑われる低体力と運動量の関係：
地域在住高齢女性を対象とした横断研究. 体育学研究 57-1：9-19.

小野里真弓、畑攻、田川絵梨ほか (2012) 運動者のニーズからみた地域スポーツ振興の現
状と課題、日本体育学会第 63 回大会発表資料.

酒井隆 (2003) 図解アンケート調査と統計が分かる本. 日本能率協会マネジメントセンター、
東京.

静岡県教育委員会 (2011) 静岡県スポーツ振興計画. 静岡.

高梨智弘 (1995) ビジュアル マネジメントの基本. 日本経済新聞、東京.

東京大学ジェントロジー・コンソーシアム (2012) 2030 年超高齢未来破綻を防ぐ 10 のプ
ラン、東洋経済社、東京.

横浜市企画局 (1997) from Y 横浜発：新スポーツ考 2008 年ライフスタイルへの提案. 元
就出版社、東京.

